

一九六〇年代における「日本文学」の編成 —— 偕成社の少年少女向け二叢書を中心に ——

佐藤 宗子
千葉大学・教育学部

Canon Formation of Japanese Literature in the 1960s: Two Collections for Young Readers issued by Kaisei-sha

SATO Motoko
Faculty of Education, Chiba University, Japan

一九六〇年代に偕成社は、異なる趣旨のもと、二つの「日本文学」に関する少年少女向け叢書を刊行した。一つは「一人一冊」スタイルの「作家」叢書の体裁を強めた「少年少女現代日本文学全集」であり、先行するあかね書房「少年少女日本文学選集」と対比しつつ既に論じたことがある。それに対し、一九六四年刊行開始の「ジュニア版 日本文学名作選」は、「全集」以上に途中での増刊を繰り返しつつ、七〇年代半ばに六〇巻で完結した。この叢書の構成を編年的に把握しながら、作品中心に題目設定がなされたことによりどのような特徴が生まれたか、「全集」との共通要素から何が言えるか、体験を交えつつ享受の状況の対照をどのように考察しうるか、といった点の追究を行い、長編収録や特定の作家の浮上、新味を持つ作品群の選定など文学研究者の関与のもと「日本文学」の編成が進められた状況を明らかにした。今後は「世界の文学」との関係や同業他社の同種叢書との対照を行うことで、「日本文学」の体系化、規範化が少年少女向けにどのように進展したか、状況把握を進めることとしたい。

キーワード：日本文学 (Japanese literature) 近代文学 (modern literature) 叢書 (collection) カノン形成 (canon formation) 少年少女読者 (young readers)

—

第二次世界大戦後の一九五〇年代後半から六〇年代にかけて、児童文学の専門出版社二社から、近代文学作家の体系化を図る叢書がそれぞれ刊行されたことについては、小稿「近代文学作家の体系化と国語教科書の役割——あかね書房・偕成社の叢書を中心に——」(『千葉大学教育学部研究紀要』第六六巻第一号、二〇一七年一二月)でその概括的な把握を試みた。すなわち、あかね書房「少年少女日本文学選集」(一九五五〜五七)と偕成社「少年少女現代日本文学全集」(一九六三〜六五)は、「一人一冊」スタイルの「作家」叢書の体裁を基本としており、国語教

科書掲載を念頭に置いた作家の選択がなされる一方、多様なジャンルへの配慮も見られること、编者側の意識には、読書を通じて収録した作家その人の歩んだ道りや努力、そして作家の人間性を学ばせようという意図が存することなどが明らかになった。

ところで、右の偕成社の叢書とほぼ同時期に、同社からは日本文学を冠した別の叢書も刊行されている。本稿では、その叢書に着目し、先述の叢書と対比しつつ、一九六〇年代における「日本文学」の編成が少年少女向け叢書でどのように進展していったのかを追究し、その体系化、規範化の状況把握を進めることとしたい。

二

本稿で主として追究するのは一九六四年に刊行開始となった「ジュニア版 日本文学名作選」であるが、その概要把握に先立ち、すでに右の小稿で追究した「少女現代日本文学全集」について、それに拠りながら簡単に概要を示しておく。

同叢書は一九六三年五月に刊行開始となった。当初の予定は全二四巻であったが、最終的には四〇巻となり、一九六五年五月に完結した。また、このうちの二四巻は、装幀や資料の変更が若干はあるものの、基本的に形態を踏襲するかたちで再編集され、一九六九年から翌年にかけて刊行されている。結果として、「現代詩歌」というジャンルを除き、「一人一冊」の作家叢書となった。なお、全体把握をしやすいうように、一覧表を本稿末尾に再び掲載する。

この叢書は凡例からも、国語教育に資するという目的が存したことが窺える。さらに「教科書との関連」という項では、収録作家の各社国語教科書収載状況が、作品ごとに対象となる学年ごとに分けた表となって示されているように、国語教科書との関係がそれなりに強く意識されている。その一方、必ずしも教科書掲載のみが重視されて作家や作品が選択されているわけでもない。つまるところは、各巻に「鑑賞」として「作品の読み方、味わい方」を置き、「読者の勉強の手引き」とすることを、国語教育的な意義とみなしていたともとれるのである。

先行するあかね書房の「少女少女日本文学選集」全三〇巻からの流れの上に立つてみて、先の小稿では、左のようにまとめた。

選ばれた作家一人ずつの、作品群を読むとともに、解説等でその人生をきちんと知ることが、総体として「文学を読む」こととなりうる。そしてそれが、青少年女読者には教養となつて培われ、その後の人生に資するものとなる。そうした課外の読書は、学校教育、就中、国語教科書を通した共通の広がりの上に成り立つことが前提であり、作家に関するさらなる読書意欲の喚起として参考図書提示もなされる。情報の流通量が今日とは比べ物にならない程少なかった時期において、付属資料を含む叢書の編成は、青少年少女期の教養形成を担う重要な使命を帯びた事業としての位置付けをもっていたわけである。

これに対して、ほぼ同時期刊行の「ジュニア版 日本文学名作選」では、どのような趣旨に基づく刊行がなされたのか。途中で何度も叢書の規模が拡大していくが、その際にどのような方向性が取られていったのか。まずは当初の段階から順次、追っていくことにしよう。

三

(1)

「ジュニア版 日本文学名作選」(以下、「ジュニア版」と略記)は、刊行当初の一九六四年段階では全二〇巻構想であったが、結局のところ、全六〇巻で七四年に完結した。なお、第三七巻については、六六年刊行時の作品が、五二巻から六〇巻に規模拡大する間に、別作品が収録された新たな第三七巻が刊行され、そのまま最終的な一覧に収まっている。このため、本稿末尾に掲載した一覧では、その両者を入れるかたちとした。

四六判で臙脂色を主体としたカバーがかかっており、函はない。このため、「少女現代日本文学全集」(以下、「全集」と略記)に比べると簡便に手にとれる形態といつてよい。「刊行のことば」と口絵写真が向かい合い、次に「この本について」一ページ、目次、本文、その後「解説」がある。「この本について」と「解説」は、基本的に同一筆者の手による。「刊行のことば」を左に掲げておこう。

ジュニア版「日本文学名作選」は、明治以来の文豪の名作、及び、ひろく世の人びとの感動をあつめた作品の中から、若い読者の皆さんにふさわしい作品を精選収録いたしました。編集にあたっては、皆さんにたししみやすく、また、読みやすくするために、つぎのような特色を生かしました。(1)作品は原文のまま収録し、表記は「現代かなづかい」「当用漢字」によりました。(2)むずかしい漢字には、ふりがなをつけ、また、特別むずかしい語句には、数字をつけて巻末に注を付しました。(3)「解説」のページをもうけ、作品鑑賞の手引きとしました。この選集は、国語教育の一端を荷なうと同時に、ゆたかな教養をつちかい、若い皆さんの人間形成のうえに大きな貢献をもたらすものと確信いたします。

作品選択の幅、収録にあたっての表記、注の存在、解説の存在など、全般的には先行して刊行開始された「全集」と共通する点がある。しかし、「全集」の凡例である「この全集について」において、「国語教育の副読本としても役だつように」とか「読者の勉強の手引きとして」「解説と鑑賞」の頁を設け」などの文言が用いられ、国語教育との関連が強くなり出でていたのとは異なり、比較的緩やかな「国語教育の一端を荷なう」といった表現にとどまっている。また、収録対象として「ひろく世の人びとの感動をあつめた作品」をあげている点も、注目される点である。

果たして、どのような作品が当初、予定されていたのか。次に、刊行当初から順に、規模が拡大する区切りを目安として、収録状況を概観していきたい。

(2)

「ジュニア版」の企画が当初二〇巻として構想されていたことは、たとえば最初に刊行された第一巻・第二巻の巻末広告から明らかである。一ページの広告には、「全二〇巻」と明記されており、その全体計画も示されている。もともと、うち第五巻までに番号が振られているのみであるのは、その後については未定の要素が大きかったことであろう。実際、刊行順が後に変更されたもの（『ゆうれい船』）、併記の短編名が変更されたもの（『地獄変・くもの糸』↓『地獄変・六の宮の姫君』）、結局収録対象から外されたもの（『片耳の大鹿』、『風の又三郎』）があることがわかる。また、作品名の後ろには、各巻の対象読者が「小中学向」または「中学向」いづれかの表示があり、小学校高学年から読者対象に入れていること、伊藤左千夫・夏目漱石・太宰治・井伏鱒二・川端康成などの作品は年長向けとして認識していることがわかる。結果的に椋鳩十・宮沢賢治を落としたことからすると、「全集」が増巻に際して児童文学作家を拾い上げたのとは逆に、むしろ「中学向」の「近代文学」乃至は「ひろく世の人びとの感動をあつめた作品」に重点を移す方向に変更していったことだろう。

そして、第一六巻の広告から、記載の仕方が変わる。すなわち、第一期一六巻＋第二期一六巻Ⅱ全三二巻、という表記となる。その後は、第二七巻広告から全四〇巻になり、そのまま完結。約一年半後に第四一巻刊行時の広告は、全五〇巻。その第五〇巻の広告では、全五二巻と微増。その後、先に述べた第三七巻の変更を経て、

第五三巻刊行時の広告では全五六巻とされるが、その第五六巻より先に刊行された第六〇巻・第五七巻の広告で全六〇巻と示され、結局時間において、第五八巻、五九巻が刊行されて、十年に及ぶ叢書刊行はいよいよ完結に至ったのである。

刊行時期の継続性に注目すれば、比較的早期に四〇巻までの計画は立てられ、その間は巻順に比較的沿うかたちで刊行されていくが、その後五〇巻まで追加一〇巻分が予定されたものの、巻順通りの刊行にはならず、その後、数巻ずつの増巻を三度重ね、それも収録作品の選定や刊行順に未定の要素を含みつつ進行した——といった状況がわかる。

おそらくは、一定の規模で収録される範囲が見えるときには、比較的順調に候補作品を挙げ、作業を進めていったのであろう。当該時期の出版上の要請などもあって、その後の増巻がなされる際には、いわば落穂拾い的なため、「これまでの収録対象を広げる」といった名目のもと、候補作を選定することになる。その困難さが、刊行までに要する時間や、巻順と刊行順の差異に表われたものと推測できる。

では、そうした企画の折々で、どのような作品選定がなされていたのだろうか。実際の収録作品から、作品傾向や巻の配置について探ってみることにしよう。

(3)

当初の巻構成で目を惹くのは、最初の二巻に『次郎物語（第一部）』、『わんぱく時代』と、少年時代を描く長編がおかれたことである。さらに、比較的早期に『しろばんば』、『路傍の石』が収録されていることとあわせてみるなら、自伝的作品を含めて、対象読者に近い年代の主人公がいかにか生きていくかを描いていく物語群が一つの主要な柱になっているといつてよからう。

また、『坊ちゃん』『山椒大夫・高瀬舟』『羅生門・トロッコ』と、明治・大正を代表する夏目漱石・森鷗外・芥川龍之介がそろう踏みする一方で、前掲の『わんぱく時代』『しろばんば』のほか、『二十四の瞳』『ピルマの竖琴』、『熊犬物語』など、戦後に刊行された作品が多いことに気付く。

これら二つの特徴からは、「全集」とは明らかに異なる収録方針が窺える。つまり、作品の物語性を重視した選定をしていくと、長編が選ばれる率が高くなるし、それと連動するように、比較的新しい作品が増える、というわけである。これはお

そらく、同時期刊行の「全集」との差異化を図った面もあるのだろう。

そして、二〇巻から三二巻へと総数が増える際には、一作品で上下巻にわたる長編も、収録されていく。『吾輩は猫である』と『ゆうれい船』である。後者は、最初の広告（全二〇巻）に作品名が挙げられていたが、おそらくは一巻に収まらないことで一度延期された想定される。こうした作品収録への意思が増巻決定につながったのか、叢書の売れ行きともあわせて増巻が決まったから、収録が確定し、他にも『吾輩』を入れることにしたのか。いずれにせよ、作家主体の「全集」では困難であった作品収録が、この「ジュニア版」方式では融通が利きやすかっただろうことが容易に想像できる。

全三二巻から全四〇巻のあたりに目を移すと、『末っ子物語』『悦ちゃん』など、少女を中心とした日常長編ものも収録されているのは、やはり「ジュニア版」の選択方針ならではといえよう。その後の『女中っ子』も、この路線の延長上で捉えることができるだろう。この時点ですでに際立つのは、夏目漱石と下村湖人の突出である。下村湖人の場合は『次郎物語』という大長編であるが、結局ここまで飛び飛びに第三部まで三冊を収録、四〇巻の区切りとなつてとうとう、第五部まで完全に収録されることになった。また漱石の場合は、『坊ちゃん』『吾輩は猫である』上下巻に加えて、『三四郎』が、全三二巻段階の掉尾を飾る。

漱石はその後も、全五〇巻構想に広がるとまず『こころ』でその幕開けをし、全五六巻段階ではふたたび掉尾を飾るべく『草枕』が収録される。結果として、漱石の作品は、五作品・六冊、すべて長編が収録されるにいたった。「全集」においても漱石は、続巻が編まれるように重視される作家ではあったが、ここでは長編は抄録となりがちであり、短編が選択される率も高かった。それに比して、「ジュニア版」では、各巻が作品名を題名としている点からも、作家による収録作品数の多少が目立ちにくい。その特徴が顕著に表われたのが、この漱石の場合と言えるだろう。

他方、巻数増加があるとはいえず、『次郎物語』が第五部まで収録されたのは、やはり強い意思があつたことと思われる。考えてみれば、『全集』でも下村湖人は、重視された作家の一人であつた。「ジュニア版」は編者名が明記されていないが、たとえば一番多く解説を執筆しているのは吉田精一であり、既に小稿で指摘したようにに彼は「全集」編集に大きく関与していた。また「ジュニア版」で五冊すべてに解説を記しているのは、荒正人である。こうした人物たちが、作品収録に影響を及

ぼしていたことは十分に考えられるのであり、その点でいうなら、「全集」の作家主体という制約にかかったことを、「ジュニア版」の企画で可能にした——とみることもできるのではないかと。

全五〇巻になったあたりから、読者対象が上がったことは、収録作品全体から窺える。ときに「中学向」というより、一〇代後半までを視野に入れたようである。青年期の生きる悩みや男女関係、生死にかかわる出来事、歴史小説など、テーマの幅は広い。

全五二巻の微増は、明らかに明治期作品の拾遺とみなせる。とくに『たけくらべ』収録で、文語作品も対象にした。逆に「全集」ではそれなりに遇されていた島崎藤村は、ここで初めての登場となる。これは、「全集」と「ジュニア版」の編集の差異を如実に示す例といえる。

全五六巻、全六〇巻への増加においては、収録ジャンルを広げたと考えられる。明らかに大衆もの——時代小説、そして福沢諭吉の自伝の収録などは、それまでの「ジュニア版」の収録作品群とは傾向を異にする。しかしながら、慣例のように叢書末尾に置かれる詩集のアンソロジーが近くにあることで、違和感は緩和されているように思う。これまで目配りしきれなかったところにも目を向けて、叢書の豊かさの仕上げを施す。そんな効果が、これら最終の選択群により、あげられているのではないかと。

なお、第三七巻の変更についても、ここで触れておく。石坂洋次郎『美しい暦』は一九六六年五月一〇日に刊行され、その後も全五二巻完結の段階までは、広告に掲載されている。そして、七〇年六月二〇日に『藪の中・河童』が刊行されて以降、すなわち全巻数が五六巻になったときから、広告ではこの芥川作品が第三七巻に置かれていく。この間の事情は現段階で詳らかにするものではないが、一つ確実に言えるのは、他の作品に置き換えるときに選ばれたのが、芥川龍之介作品だった、ということである。そもそも当初の二〇巻企画の段階で、芥川は二冊収録が予定されていた——『羅生門・トロッコ』『地獄変・くもの糸』である。このうち後者が、題名が変更され、少し後の巻として収録されたことについては、既に述べた短編中心の芥川作品が、「ジュニア版」ではさほどの冊数収録に至らないのは、自明と言つてもよい。それが、読者対象が少し上がり、収録の幅も広がる中で、『藪の中・河童』と表題作からしてまさに対象年齢が少し上であるような作品が、選ば

れていったわけである。

(4)

「ジュニア版」各巻には解説が付されていることはすでに触れた。解説者の一覧を見て気づくのは、一方で一巻のみの解説者も多い中、他方で相当数の巻に解説を書いている者もいるという点である。第三七巻が二冊あることを考慮して、全体を六一冊とするが、このうち複数の巻に解説を書いている執筆者をまとめると、左記のようになる。

- 一〇冊……吉田精一、六冊……荒正人、五冊……村松定孝、四冊……山室静
三冊……瀬沼茂樹、鳥越信、小松伸六
二冊……塩田良平、福田清人、板垣直子、夏目伸六、鈴木亨

このほか、一冊のみの執筆者が十七人いるわけだが、複数冊執筆者の中でも、吉田精一がずば抜けて多いのが目立つ。六冊とはいえ荒正人の場合、このうち五冊は『次郎物語』であって、他は『山椒大夫・高瀬舟』のみである。五冊の村松定孝も『コタンの口笛』上下巻を含むし、『三四郎』『こころ』と後半収録の漱石作品二冊執筆もある。それが吉田精一の場合は、『わんぱく時代』『走れメロス・女生徒』『友情』『ジョン万次郎漂流記』『小さき者へ・生まれ出する悩み』『落城・小さな赤い花』『藪の中・河童』『出家とその弟子』『性に目覚める頃』『舞姫』と、作家の重なりもなく、作品傾向も多岐にわたる。あるいは、この叢書も吉田が編集に関わり、解説が依頼しにくい場合に彼自身が引き受けていたのかもしれないといった推測も、そこからは生まれる。

さて、彼ら解説者たちの読者に対する姿勢は、いかなるものであったか。ここですべての解説者について詳述する違はない。やはり、多くを担った解説者という点とで、第一巻の荒正人、変更後の第三七巻の吉田精一に焦点を当て、ここでは巻頭に置かれた「この本について」について、少し長くなるが全文を掲げて、考えてみることにする。

記念すべき第一巻の巻頭で、荒正人は次のように言う。

下村湖人の『次郎物語』は、少年少女のみなさんに、ぜひおすすしたい物語のひとつです。／この物語は、著者の想像や空想だけでまとめたものではなくて、体験や見聞をもとにした、いわば、自伝小説です。この本には、そのうち、この物語の主人公次郎が、幼年から少年に成長していく道筋を述べた、第一部をおさめました。／みなさんは、この物語を読むとき、ただおもしろがるだけでなく、みなさん自身の身の上と次郎のそれとをくらべてみてください。自分がもし次郎の立場ならば、どうするだろうか、考えながら読んでいただきたい。そうすることで、みなさんの心のなかに豊かになります。／次郎は、里子にだされたこともあって、自分が家族に歓迎されぬ子どもだと考え、悲しみます。一時はひねくれたりもします。やがて心をふるい起こし自分の暗い性質を明るく作りかえて、たくましく生きていきます。／こういう物語を読むと、みなさんの心は、きっと明るくはげまされることでしょう。そして、この世に生きていくためには、自分で自分をきたえていかなければならぬという強い自覚をもつことでしょう。

他方、『藪の中・河童』の「この本について」で吉田は、以下のように言う。

一流の作家は、人間としてよりっぱな人が多いのですが、芥川龍之介もその例にもれません。かれは自分の一生の仕事ときめた文学の仕事にすべてをうちこみ、わきめもふらずに精進努力の日々を送りました。その結果よそめには幸福と見える名声をえましたが、かれ自身にとっては、休むひまのない、血のでるような苦しみの連続でした。／こうしてできた彼の作品は、粒は大きくはないが、みがきにみがい玉のような美しいできあがりのものが多いのです。そうしてその一つ一つが、人間の真実をどうかしてつかもとうとする心がまえを示していないものはないのです。今日のようにジャーナリズム（新聞・雑誌など）がさかんで、作者もその注文で手早く、そまつな作品を製造することの多い時代では、いっそうかれのしんけんな態度が光ります。／この本にはかれの作品の中から、年のいかない人々にとってもおもしろく読めそうなくつかをえらんでみました。芥川には年少の人のために筆をとった童話のたぐいがありますが、それはべつの本にはいつています。この本はおとなのために書いた本格的な作品ばかりで、すこしむずかしいかもしれませんが、よく読めばなにかを教えてくれる有益なもののみ

(5)

だと信じます。

両者を比べると、少年少女読者への差し出し方に大きな差があるのがよくわかるだろう。前者は、自伝小説であることには言及するものの、作家がどのような人物であったかということには、全く触れない。ここでは、読者がどのように作中人物を受け止めるとよいかを、提示する。もちろん最後には、読後の読者への期待も示されるが、一貫して、「この物語」が何であるかという点から、作品への導入を図っていることは明らかである。それに対し後者では、まず、作者がどのような人物であるかを、段落一つを使って説明する。そして「こうしてできた彼の作品」ゆえに高い評価を下しうるのだ、という論法に持ち込む。第二段落の最後でも、「かれのしんけんな態度」を称える。読者への導入となる最終段落でも、結局は「よく読めば（略）有益」という、何とも漠然としたことしか述べられない。荒が物語と読者結び付けようとするのに対し、吉田が作者自身の姿を浮かび上がらせようとしているのが、まことに対照的に映る。

このような吉田の姿勢と彼の担当冊数が多いことから、「ジュニア版」も「全集」と共通する文学の位置づけのもとに作られていたと考えてよいだろう。ただし、作品中心の巻構成であり、国語教育との接点が薄かったことから、実際に読者に手渡されるときには、その度合いが薄められていただろうことが予想される。それは、この叢書がどのように読者の手に渡っていったかともかわることになる。

四

「ジュニア版」は、一九六〇年代から七〇年代にかけての時代、いわゆる町の小売書店に、常備されることが多い叢書であった。これは一九五五年生まれの本稿執筆者自身の見聞になるが、当時の東京二三区内の商店・住宅が混在するような地域の町の小売書店では、児童書コーナーの上段は大体、棚一段分くらいはこの叢書の臙脂色の背表紙が埋めていた。もちろん、全巻が揃っているわけではない。だが、小学校高学年が少し背伸びするところから始まる「文学」というものが、それにより、認識されていた面は否めない。

個人的な読書体験に触れると、私は小学校五年生の頃に、『わんぱく時代』『吾輩

は猫である』『山椒大夫・高瀬舟』に出会っている。つまり、最初の鷗外・漱石体験は、この「ジュニア版」でなされたわけである。初めて目にする明治期の言葉も多かったし、ましてや歴史物では固有名詞等も多く出てくるが、注釈が充実しており、またわからないところはそれとして吞みこむことで、刺激的な読書体験をすることができた。自伝的な『わんぱく時代』で、明治期の学校制度や大逆事件の事などを知ったのも、印象に残っている。この時、教師や図書館員といった媒介者は、一切介在していない。つまり、市販され、一冊ずつ切り売りされやすい作品中心の叢書は、それだけ、個人的な読書につながる可能性が高いことができる。

もう一つ、「ジュニア版」の実際の読書のされ方を紹介しておこう。日英の完全なバイリンガルである比較文学者、新井潤美は、『不機嫌なメアリー・ポピンズ——イギリス小説と映画から読む「階級」——』（平凡社新書、二〇〇五）のなかのある箇所で、獅子文六『悦ちゃん』に言及している。新井が少女期の大半を異国で過ごしたことを知るだけに、二〇〇五年の時点では知名度の低かったこの作品になぜ触れたのか、不審に思っ尋ねたことがある。実際のところは、日本語を忘れないように、新井の父親が日本から少年少女向文学叢書を取り寄せて揃えており、新井はそれを読むことで日本の文学・文化に接していたという。新井にとっては、まさに叢書の構成こそが「日本の文学」を総体としてあらわすものであったのである。学校という場所、国語教育という回路を念頭に置いて作られた「少年少女現代日本文学全集」とは別のかたちでの、「教養形成」に資する叢書の編集・出版は、その意味では有効に働いたと言っよいだろう。作品中心の構成は、市販の流通に向くものであり、それだけ柔軟に一点ものの作品を収録することもできた。また戦後の新しい作品から明治・大正期の作品まで、書かれた時代をさほど意識することのない収録のしかたは、豊富な注釈や少年少女向けの装幀のおかげもあり、作者を知らずに出会えるという偶然の出会いの機会を作ることにもつながった。もちろん、叢書普及の時期における小売書店の状況が、今日とは比べものにならない程、少なくとも都市部では活況を呈していたことも理由に挙げなければなるまい。

五

第二次大戦後の少年少女に向けた「日本文学」の編成——就中、近代文学の編成

は、作家中心の叢書と相俟って刊行された作品中心の叢書により、一層、重点化される作家・作品が明確になっていった。その中心には、夏目漱石がいる。また、長編の、少年主人公の作品ということでは、下村湖人『次郎物語』も、ある意味では特権的な位置を占めていた。ただしそこには、一九六四年から二年間にわたりNHKで放映されたテレビドラマ「次郎物語」の影響もあったかもしれない。なお、「ジュニア版 日本文学名作選」の収録作品の中には、映像化されたものが多いが、長編であることと映像化の関係は、今後の検討に委ねることとしたい。

その際の「文学」からは、かつて五〇年代の河出書房やあかね書房などでは混じることがあった「童話」作品や、「児童文学」作品が後退していることも、目に留めるべきことだろう。

さらに、「日本文学」と「世界の文学」を、どのように対応させるかといったことも、出版社は叢書刊行における課題として抱えることになる。たとえば偕成社も、「ジュニア版 日本文学名作選」刊行時期と同じ六〇年代に、「ジュニア版 世界文学名作選」という叢書を刊行しているが、その収録作品はすべて、まさに世界の一般向けの文学作品である。「世界の文学」に引け張られるようにして、「日本文学」の叢書の作品選定も対象年齢が高めになった可能性も排除できない。また、偕成社の二つの「ジュニア版」叢書に対抗するように、ポプラ社は日本・世界双方の文学作品を対象とした「アイドル・ブックス」という叢書を刊行していく。収録作品にはかなりの共通性があり、次にはこうした作品中心の叢書同士の比較対照も、追究していくべきことである。

次の課題が見えてきたところで、本稿の筆を措くことにしたい。

※本稿は、科学研究費補助金基盤研究(C)「戦後児童文学にみる「文学」の体系化と規範化——少年少女向け叢書を中心に」(課題番号16K02398、平成二八年度～三一年度)の研究成果の一部をまとめたものである。

※本稿の骨子は、二〇一七年一月二五日(土)開催の日本児童文学学会第五六回研究大会の席上における研究発表「作品を読む、作家に学ぶ——戦後の少年少女向近代文学叢書の確立——」の中で、発表した。

少年少女現代日本文学全集（偕成社） 24→40巻 ⇒⇒ 後に24巻で再刊行

監修 = 川端康成・佐藤春夫・高橋誠一郎・久松潜一

編集委員 = 滑川道夫・福田清人・吉田精一

後の24巻の場合

巻	配本	年月日	題名	解説	鑑賞	巻	配本	年月日
1	14	1963.12. 1	森 鷗外 名作集	吉田精一	滑川道夫と斎藤喜門	4	7	1969.10.10
2	22	1964. 3.25	国木田独歩 名作集	福田清人	堀内輝三			
3	3	1963. 6.25	島崎 藤村 名作集	山室 静	黒沢 浩	5	8	1969.10.10
4	1	1963. 5.25	夏目 漱石 名作集	福田清人	飛田文雄	1	1	1969. 7. 5
5	16	1963.12.25	続 夏目漱石 名作集	伊藤 整	今村秀夫	2	2	1969. 7. 5
6	13	1963.11.15	小泉 八雲 名作集	山室 静	加藤哲郎	8	5	1969. 9. 5
7	10	1963.10. 5	石川 啄木 名作集	吉田精一	増村王子	7	9	1969.11.10
8	18	1964. 1.30	北原 白秋 名作集	木俣 修	増村王子	15	16	1970. 3.15
9	21	1964. 3. 5	有島 武郎 名作集	瀬沼茂樹	野村純三	13	13	1970. 1.20
10	8	1963. 9. 5	武者小路実篤名作集	瀬沼茂樹	飛田文雄	14	14	1970. 1.30
11	5	1963. 7.25	志賀 直哉 名作集	吉田精一	斎藤喜門	11	12	1969.12.20
12	2	1963. 5.25	芥川龍之介 名作集	吉田精一	谷川澄雄	3	3	1969. 8. 5
13	11	1963.10.20	菊池 寛 名作集	福田清人	今村秀夫			
14	12	1963.11.10	山本 有三 名作集	滑川道夫	柳内達雄	9	6	1969. 9.20
15	17	1963.12.25	佐藤 春夫 名作集	吉田精一	谷川澄雄			
16	6	1963. 7.25	宮沢 賢治 名作集	滑川道夫	野村純三	6	10	1969.11.10
17	20	1964. 2.25	坪田 譲治 名作集	浅見 淵	斎藤尚吾	20	19	1970. 5.15
18	15	1963.12. 5	川端 康成 名作集	福田清人	黒沢 浩	17	17	1970. 4.15
19	9	1963. 9.15	太宰 治 名作集	奥野健男	亀村五郎	21	21	1970. 7. 5
20	7	1963. 8.10	壺井 栄 名作集	滑川道夫	加藤達馬	10	4	1969. 8. 5
21	19	1964. 2.10	井上 靖 名作集	三好行雄	飛田文雄	23	23	1970. 7.20
22	4	1963. 6.25	下村 湖人 名作集	福田清人	今村秀夫	12	11	1969.12.15
23	23	1964. 4.10	椋 鳩十 名作集	滑川道夫	たかし・よいち	22	22	1970. 7. 5
24	24	1964. 4.30	現代詩歌 名作集	吉田精一	—	24	24	1970. 7.20
25	37	1965. 3.25	寺田 寅彦 名作集	山室 静	斎藤喜門			
26	33	1965. 1. 5	鈴木三重吉 名作集	滑川道夫	谷川澄雄			
27	38	1965. 4. 5	小川 未明 名作集	福田清人	中川 暁	16	15	1970. 3.10
28	27	1964. 8. 5	続芥川龍之介名作集	田中保隆	亀村五郎			
29	29	1964.10. 5	続 山本有三 名作集	高橋健二	滑川道夫			
30	28	1964. 9. 5	高村光太郎 名作集	阪本越郎	増村王子			
31	35	1965. 3. 1	室生 犀星 名作集	奥野健男	今村秀夫			
32	39	1965. 5.10	浜田 廣介 名作集	福田清人	加藤達馬			
33	30	1964.10.30	大佛 次郎 名作集	小松伸六	西山健太郎			
34	32	1964.12.10	堀 辰雄 名作集	山室 静	大西 貢			
35	40	1965. 5.10	続 宮沢賢治 名作集	恩田逸夫	野村純三			
36	31	1964.11.15	井伏 鱒二 名作集	吉田精一	水野寿美子			
37	25	1964. 7. 1	林 芙美子 名作集	板垣直子	黒沢 浩	18	18	1970. 4.15
38	26	1964. 7.15	石坂洋次郎 名作集	平松幹夫	佐々木元一	19	20	1970. 5.15
39	36	1965. 3. 1	木下 順二 名作集	越智治雄	黒沢 浩			
40	34	1965. 1.15	中西 悟堂 名作集	木俣 修	大江田貢			

ジュニア版日本文学名作選 (偕成社)

推薦 = 武者小路実篤、吉田精一

20 → (16+16) → 40 → 50 → 52 → 56 → 60

解説者

1	1964. 9.25	次郎物語 (第一部)	下村湖人	荒 正人
2	1964. 9.25	わんぱく時代	佐藤春夫	吉田精一
3	1964.10.25	野菊の墓	伊藤左千夫	塩田良平
4	1964.11. 1	坊ちゃん	夏目漱石	松岡 譲
5	1964.11.15	二十四の瞳	壺井 栄	山室 静
6	1964.12. 1	羅生門・トロッコ	芥川龍之介	高木 卓
7	1964.12.25	しろばんば	井上 靖	福田宏年
8	1964.12. 5	路傍の石	山本有三	福田清人
9	1964.12.25	熊犬物語	戸川幸夫	子母沢寛
10	1964.12.25	走れメロス・女生徒	太宰 治	吉田精一
11	1965. 2.10	ビルマの堅琴	竹山道雄	鳥越 信
12	1965. 2.25	伊豆の踊子	川端康成	村松定孝
13	1965. 3.10	怪談	小泉八雲	平井呈一
14	1965. 4.10	山椒大夫・高瀬舟	森 鷗外	荒 正人
15	1965. 3.25	友情	武者小路実篤	吉田精一
16	1965. 5.15	ジョン万次郎漂流記	井伏鱒二	吉田精一
17	1965. 5.25	小さき者へ・生まれ出ずる悩み	有島武郎	吉田精一
18	1965. 6.15	未っ子物語	尾崎一雄	浅見 淵
19	1965. 7.10	吾輩は猫である (上)	夏目漱石	夏目伸六
20	1965. 7.20	吾輩は猫である (下)	夏目漱石	夏目伸六
21	1965. 7.30	次郎物語 (第二部)	下村湖人	荒 正人
22	1965. 8.20	真実一路	山本有三	高橋健二
23	1965.10.15	地獄編・六の宮の姫君	芥川龍之介	三好行雄
24	1965.11. 1	子供の四季	坪田譲治	鳥越 信
25	1965.11.15	恩讐の彼方に	菊池 寛	瀬沼茂樹
26	1965.11.20	母のない子と子のない母と	壺井 栄	鳥越 信
27	1965.12.15	ゆうれい船 (上)	大佛次郎	小松伸六
28	1965.12.15	ゆうれい船 (下)	大佛次郎	小松伸六
29	1965.12.20	悦ちゃん	獅子文六	瀬沼茂樹
30	1966. 1.10	武蔵野	国木田独步	山室 静
31	1965.12.30	次郎物語 (第三部)	下村湖人	荒 正人
32	1966. 1.10	三四郎	夏目漱石	村松定孝
33	1966. 2.15	コタンの口笛 (第一部)	石森延男	村松定孝
34	1966. 2.15	コタンの口笛 (第二部)	石森延男	村松定孝
35	1966. 3.15	女中っ子	由起しげ子	板垣直子
36	1966. 4. 5	落城・小さな赤い花	田宮虎彦	吉田精一
37	1966. 5.10	美しい暦	石坂洋次郎	平松幹夫
37-2	1970. 6.20	藪の中・河童	芥川龍之介	吉田精一
38	1966. 5.20	哀しき少年	野上彌生子	瀬沼茂樹
39	1966. 4.10	次郎物語 (第四部)	下村湖人	荒 正人
40	1966. 5.10	次郎物語 (第五部)	下村湖人	荒 正人
41	1967.11.10	こころ	夏目漱石	村松定孝
42	1968. 1.15	出家とその弟子	倉田百三	吉田精一
43	1967.11.20	愛と死	武者小路実篤	中川 孝
44	1968. 2. 5	一握の砂・悲しき玩具	石川啄木	鈴木 亨
45	1968. 3.25	放浪記	林芙美子	板垣直子
46	1968. 2.15	パリに死す	芹沢光治良	進藤純孝
47	1968. 9.25	智恵子抄	高村光太郎	村野四郎
48	1968. 8.10	風立ちぬ・菜穂子	堀 辰雄	山室 静
49	1969. 1.10	青年・雁	森 鷗外	高橋義孝
50	1969. 2.25	天平の薨	井上 靖	山本健吉
51	1969.10.20	たけくらべ	樋口一葉	塩田良平
52	1969.10.20	桜の実の熟する時	島崎藤村	山室 静
53	1971. 2.10	鞍馬天狗 [角兵衛獅子の巻]	大佛次郎	小松伸六
54	1971. 2.20	性に目覚める頃	室生犀星	吉田精一
55	1971. 6.20	姉妹	畔柳二美	佐多稲子
56	1973. 3	草枕	夏目漱石	福田清人
57	1972.11	忘れ残りの記	吉川英治	尾崎秀樹
58	1974. 9	福翁自伝	福沢諭吉	高橋誠一郎
59	1974.11	舞姫	森 鷗外	吉田精一
60	1972. 1	愛の詩集	編・鈴木亨	鈴木 亨